四旬節第４主日

第一朗読　歴代誌下 36・14-16、19-23
第二朗読　エフェソ 2・4-10
福音朗読　ヨハネ 3・14-21

2024.3.10 9：30 ミサ
カトリック高円寺教会
主任司祭　高木健次神父

今日の福音、「モーセが荒れ野で蛇を上げたように、人の子も上げられねばならない。それは、信じる者が皆人の子によって永遠の命を得るためである」（ヨハネ 3・14-15）というイエス様の言葉は、ちょっと謎めいています。しかし、わたしたちがいつも信仰を通して大切にしている十字架を通して与えられる恵みをよく考えるように、今日のみことばはわたしたちを促していると言ったらいいと思います。

十字架は、いつもお祈りのときに十字架のしるしをしたり、そしてこの聖堂においてもイエス様の十字架上の姿を仰ぎ見るようにご像、十字架の像が掲げられている。わたしたちの信仰にとっての最も――と言って良いでしょう――大切な一つのしるしであります。でも、その意味を時々忘れてしまうと言いましょうか、深く考えないということはあるかもしれません。だから、絶えずわたしたちはその十字架を通して示されていることを意識する必要があります。

パドヴァのアントニオっていう聖人がいます。1200 年頃の主にイタリアで――もともとはポルトガルの人ですけど――フランシスコ会で活躍した神学者です。そのパドヴァのアントニオという人は、「十字架の像は、鏡のように、わたしたちが何者であるかをわたしたちに示す」っていうふうに書いています。でもその「わたしたちが何者であるか」というのは十字架によって二つ示されているんです。それはコインの両面のように切り離すことができないものですけども、一つは、わたしたちが自分の罪によって傷ついていること、その傷がいかに致命的か、いかに深いかということを十字架は示している、とアントニオは言います。それは、わたしたちの傷は、神の子の御血の他はどんな医者も癒すことができないほど傷ついているっていう、一人ひとりの罪の中にある有様（ありさま）を、イエス様が、神の子が、苦しんでいる、その姿の中に示されているというわけです。

もう一つは、そうであっても、今日のみことばにもあったように――「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された」（ヨハネ 3・16）とありますが――この罪によって傷ついているわたしたちをご自分のもとに取り戻す、連れ戻すために神の子がご自分の命を与えてくださった。神の命によって贖（あがな）われるほどにわたしたちの存在は尊いものである、ということなんです。

その二つが、鏡のように十字架を通して示されている、わたしたちが何者かを。一つは、神様しか癒すことができないほど罪によって傷ついている。しかし、そのわたしたちを神様ご自身がご自分の命で癒してくださる。神様の命によって癒されるほどに貴い存在である。この二つの信仰における現実を十字架の中に見るようにと、パドヴァのアントニオは招いているというわけです。

わたしたちは四旬節の間、また四旬節じゃなくても、たぶん自分自身の至らなさ、自分がいろいろなときにイエス様から遠く離れているっていう自分の罪について思い起こすということは得意かもしれません。場合によってはそこから目を背けるということもある、正当化するということもあるわけですけれども、自分のダメな所、良くない所を挙げるとするならば――誰にも見られないという状態で紙に書いていこうとするならば――、数限りなく、そしてどんどん思い浮かんで、紙がいっぱいになるように書いていくことができるのではないかと思います。

でも、それだけでは足りないわけです。アントニオが言うように、それはわたしたちがいかに傷ついているか、罪によって自分自身が損なわれているかという面を表わしている。しかし、ではそんなわたしたちを愛して、ご自分の命を与えて救ってくださる、その神様の恵みによって貴いものとされた自分ということを思い起こすことは出来るでしょうか。それもやっぱり思い起こさなければならないわけです。

今日の第二朗読でパウロは、「わたしたちは神に造られたものであり、しかも、神が前もって準備してくださった善い業のために、キリスト・イエスにおいて造られたからです。わたしたちは、その善い業を行って歩むのです」（エフェソ 2・10）っていうふうに言ってます。イエス様の命によってわたしたちは造り変えられた、神様が前もって準備してくださった善い業を行うために。それは、いつか、将来のことではなくて、今、この時点ですでにその恵みは実現しているはずなんです。

完成はしていないかもしれません。でも、振り返ってみれば、わたしたちも善い業――小さいことかもしれません、誰かのために何かをする、時間を取る、あるいは、言い返したいと思ったときに、でもぐっとこらえて我慢するとか、許すとか。良い雰囲気を保つように努めたとか――そういう、家庭において、あるいは職場において、また日々出会う人の繋がりの中で、何事か善いことをしている瞬間というのはあるはずなんです。それを思い起こすということもとても大切なことだと忘れてはならないと思います。

それは、自分はまだまだ大丈夫だっていうふうに安心するためではありません。そうではなくて、この罪によって傷ついている自分であっても、神様の、イエス様の恵みが支えてくださっているので、そこに希望がある。この自分の罪の闇の中にも神様の恵みによって善い行いができる瞬間、善い思いを持つことができる瞬間がある。それを通して神様の、イエス様の十字架を通して与えられた恵みに感謝する。そのために、自分自身の中にある善いものをもちゃんと思い起こして注目していく必要があるということです。

今日、四旬節第４主日の祭服は、伝統的にと言いましょうか、ばら色を使うことができるっていうふうになっています。四旬節は大体は紫色ですけど、でも間もなく復活祭が近い、神様の恵みはもうわたしたちのすぐそばにあるということを思い起こす、そういう主日でもあります。それは、ただただカレンダー上の復活祭の近さということだけではなくて、わたしたちが神様から遠く離れた状態でありながら、しかし神の恵みはわたしたちの中にある、働いているという救いの現実を思い起こす、そういう意味の喜びの色、ばら色でもあると思います。わたしたちが自分自身の至らなさを直視するということは大切であると同時に、しかし光は闇の中でも輝いているっていう、ヨハネの福音書の最初の方に出て来ることばですけど（ヨハネ1・5参照)、わたしという闇の中でも、でもイエス様の光が輝き続けていることを通して与えられる、自分が行うことができた善い業そのものを感謝する、そのことも大切だと思います。

わたしたちがどのようなものであっても、絶えずご自分を与え続けて、本当にわたしたちが生きることができるようになる善い業に導いてくださるイエス様の十字架の恵みに信頼しながら、今日も一人ひとりの中にイエス様をお迎えして、それぞれの中にイエスと共に善い業を実現していくことができますように、その導きと助けを願いたいと思います。

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。
PC　http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi
携帯　http://www.koenji-catholic.jp/mobile/